

平成 30 年 6 月 1 日現在

機関番号：17201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370952

研究課題名(和文) 河川流域における漁撈活動と環境のかかわりを中心とした生業複合に関する民俗学的研究

研究課題名(英文) Folkloric study on the subsistence complex centered on the relationship between the fishing activity and the environment in the river basin

研究代表者

藤永 豪 (FUJINAGA, GO)

佐賀大学・教育学部・准教授

研究者番号：00409955

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、四万十川と筑後川における漁家の生業活動と自然環境との関わりについて、漁撈活動を中心に考察した。四万十川では伝統的な漁撈活動と民俗知、環境認識が残っていたが、観光化やFRP船の導入により新規参加者が増え、旧来の慣習が崩れ、生業複合のあり方が変化していた。また、河口工事により、潮汐変動や汽水域、生態系が変化し漁民の環境利用に影響を与えていた。一方、筑後川ではダム建設等により、生業としての漁撈活動は衰退し、養殖・放流などの資源保護へと移行していた。ただし、一部の漁家ではダムの放水や水位変動をみながら漁を行うなど、ある意味人工的な河川環境の中で新たな環境利用が生じていることが分かった。

研究成果の概要(英文)：This study focused on fishing activities, about the relationship between the fishermen's livelihood and the natural environment in Shimanto River and Chikugo River. In the Shimanto River, traditional fishing activity, folk knowledge and environmental cognition remained, but as tourism and the introduction of FRP ship increased the number of new entrants, traditional customs collapsed, and the manner of the subsistence complex was changing. Also, due to the construction near the estuary, tidal fluctuations, brackish water areas, ecosystems changed, affecting the environmental use of fishermen. In the Chikugo River, due to the construction of the dam, fishing activity declined and it shifted to resource conservation such as aquaculture and discharge. However, some fishermen have continued fishing while observing the time of water discharge and the change of water level of the dam, and it turned out that new folk knowledge is occurring even in an artificial river environment.

研究分野：人文地理学

キーワード：漁撈活動 生業複合 環境認識 環境利用 河川

1. 研究開始当初の背景

(1) これまで、漁撈活動に関する研究は、人文・社会科学分野においても数多く蓄積されてきたが、その多くが海域での漁撈活動についての研究であり、経済活動としての漁撈活動を対象としたものであった。

(2) その一方で、文化人類学や民俗学、地理学を中心として、経済活動としての漁業以外にも漁民の環境利用、環境認識、資源管理等にかかわる文化生態的な研究が行われるようになってきた。申請者も有明海を中心に干潟・浅海域における漁撈活動について、調査研究を進めてきた(藤永 2009, 2010)。

(3) しかしながら、文化生態的な視点からの研究が盛んになりつつも、その多くが東南アジアやアフリカなどの海外をフィールドとしたものであり、国内のとりわけ河川における漁撈活動についての民俗学的研究は未だ十分とは言えない。

2. 研究の目的

(1) 上記のような河川漁撈に関する研究状況を受けて、本研究では、国内の複数の河川、具体的には、四国の四万十川と九州の筑後川を対象に、河川流域における漁家の生業活動と自然環境とのかかわり、およびその変化について、漁撈活動を中心に考察することを目的とした。

(2) それは、現代における人間活動と自然環境との関わりや、これに基づく暮らしのあり方を考えていく上で、水環境を主軸とした考察は不可欠であり、とりわけ、わが国における自然改変と社会経済環境の変化の大きな影響を受けてきた河川流域に関する地域研究は、学術的側面だけでなく、社会的側面においても十分な意義を持つと考えたからである。

3. 研究の方法

(1) まず、本研究では、生業複合の観点から漁撈活動を捉え、自然環境とのつながりとその変化について着目することにした(秋道 2007)。

(2) 生業複合の観点を取り入れたのは、河川漁撈は、それ単独で家計を支え得るような生業活動ではなく、農業や狩猟・採集、賃金労働など、さまざまな生業と組み合わせた形で1戸の生計を成り立たせてきたからである。

(3) また、一部を除いて、河川での漁撈活動は、高度経済成長期を境に、恒常的な兼業が浸透するなど、社会経済環境の変化に大きく左右されるとともに、ダムや堰、堤防の建設、生活・工業排水による水質の悪化といった環境そのものの改変、淡水魚自体の需要の低迷など、食生活の変化によって、離漁が進行し、各地における漁撈活動は衰退傾向にある。その点においても、漁撈活動の位置づけは再考の余地がある。

(4) こうした現代社会の中で、漁家たちはどのように、具体的に河川という水域環境と

結びついているのか、その利用や認識、民俗的知識について、四万十川および筑後川流域において、実際の漁撈活動に関する聞き取り調査および参与観察を行った。

4. 研究成果

(1) まず、基礎データとして四万十川および筑後川における近年の漁獲量をみってみる。例として、図1に四万十川における漁獲量の推移を示した。日本最後の清流とも呼ばれる四万十川においても近年の漁獲量の減少は著しい。筑後川においても同様である。これには、後述するように、生活・工業・農業用水の確保のための堰やダムの建設、河川堤防のコンクリート化、砂利採取のための浚渫工事等が影響していた。

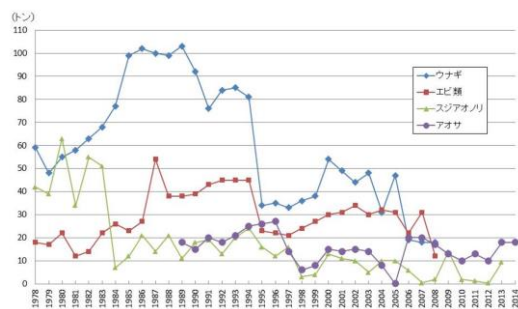


図1 四万十川における漁獲量の推移

(高知県農林水産統計年報および高知県内水面漁業漁獲調査をもとに作成)

(2) 両河川とも漁獲量は減少しているが、四万十川においては、伝統的な漁撈活動も減少されている。



写真1 ウナギのコロボシ漁 (2016年7月藤永撮影)



写真2 河口付近のイシグロ (2016年7月藤永撮影)

写真1は、四万十川中流域におけるウナギのコロボシ漁である。杉材を使用して、箱形の笥を作り、テナガエビやミミズを餌にする。

写真2は、河口付近の汽水域で見られるイシグロと呼ばれるもので、干潮時に石を積み、その中に入り込んだウナギをとる漁法である。

に石を積み、その中に入り込んだウナギをとる漁法である。

(3) こうした漁法には、漁民たちの河川環境に対する知識や認識、それをもとにした技術が隠されている。例えば、先ほどのウナギのコロバシ漁だが、河口付近の汽水域の漁家は、長さ 60cm ほどの竹製の筥（コロバシ）を約 6m 間隔で 150 個ほど連結（約 900m）し、漁を行う。エサはミミズだが、塩水に触れると死んでしまうため、干満や大雨の際の増水に気を遣う。そのため、自分たちが仕掛けた水域に、どのくらいの時間で潮が上がってくるのか、あるいは、どのくらい増水が続くのかを細かく観察している。当然、淡水と塩水では比重の差から、塩水が這うように川底を移動してくるが、この漁家はそれをソコジオと呼び、その移動状態を常に勘によって把握し、漁を行っていた。

また、写真 2 の漁家は、アユ漁も行う。その際、対象魚としてのアユの生態と川底の微地形の関係をやはり細かく認識している。図 2 は、その漁家への聞き取り調査をもとにした川底の微地形のモデル図である。トロは、水深ある流れの緩やかな水域である。セは逆に浅く、川面が激しく波打つ流れの早い場所である（写真 3）。セの中でも上流の方をセガタ、下流の方をセズリと呼ぶ。アユ、特にいわゆる落ちアユの場合、夜間はトロで休んでいるため、それらのアユを捕獲するための火光を利用した刺し網漁（火振り漁）を行う。ただし、漁期は決められており、現在では 12 月 1 日の解禁となっている。セは日中、アユが盛んに採餌活動を行う場所であり、コロガシや友釣りの格好の漁場となる。その中でも、セの流心であるミヨと呼ばれる場所から少し離れたセガタ付近にアユが多くツクと言われる。加えて、産卵期のアユはセガタに比べて、川底の石や砂のつまりが緩やかなセズリを好むという。

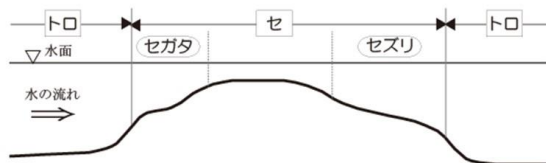


図 2 川底の微地形に関する名称
(聞き取り調査により作成)

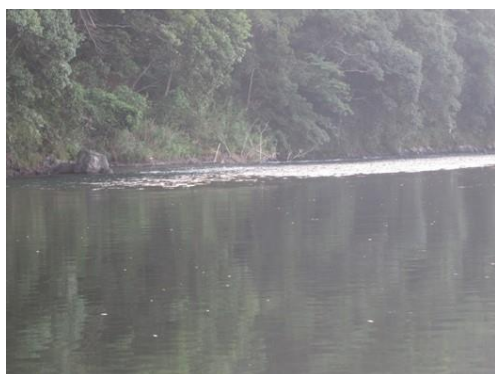


写真 3 トロとセ (2016 年 7 月 藤永撮影)

左手前の穏やかな水面の場所がトロ、その先の波立っている箇所がセである。

このように、四万十川の漁師たちは、水域環境を細やかに分類し、認識するとともに、これらに関する多様な知識を組み合わせながら、漁を展開（状況変化の判断と対応）しており、同河川の環境を主体的に認知し、独自の環境観と民俗的知識体系、必要な技術（漁具）を構築しながら、世帯維持のための 1 部門としての漁撈活動を成り立たせてきた。

(4) 一方、筑後川流域では、下流部の久留米市をはじめとする都市の発達やその他の福岡県内、佐賀県内の生活・農業・工業用水等の確保や電源開発、洪水防止のために、古くからダム建設などの開発工事が行われてきた。一例として、1954 年、現在の大分県日田市夜明付近に完成した夜明ダムが挙げられる。また、1985 年には、現在の福岡県久留米市と佐賀県三養基郡みやき町の間に、筑後大堰が完成した（写真 4）。筑後川は、有



写真 4 筑後川大堰 (2016 年 8 月 藤永撮影)

明海に流れ込み、その下流域は広大な汽水域となっていたが、そのほかの開発もあって河川の生態系は大きく変化した。加えて、淡水魚の需要が高度経済成長期を迎える中で減少し、取引先の料亭や鮮魚店の閉店なども相まって、筑後川における漁撈活動は衰退していくことになった。つまり、生業複合における漁撈活動の位置づけの低下を意味する。筑後川における漁のピークは 1960~1970 年代頃であり、流域に存在する漁業協同組合の活動のほとんどが稚魚の放流や養殖などの魚族資源の保護となっている。筑後川下流域では、カタクチイワシ科のエツ漁が初夏の風物詩となっているが、これも観光を主目的としたものである。

しかし、その一方で、聞き取り調査によれば、そうした筑後川の自然環境の改変の中でも、漁を継続している漁家も存在する。前述の夜明ダムの湖岸に居住する漁家は、現在でもアユ漁などを行っている。ただ、ダムや堰によってアユの遡上は不可能であり、同ダムより上流において放流されたアユが対象となっている点には注意しておきたい。この漁家は、ダム沿岸の湖底地形はもちろん、降水による水位変動、ダムの放流の際のアユの動きを観察し、アユを捕獲している。場合によっては、ダムの放流時間の周知について、漁

を行う立場から、行政側に要請を行う場合もある。ある意味では人工的に改変された河川環境において、新たな漁撈に関する技術や知恵、環境認識が生まれているともいえよう。

(5) 実は、四万十川においても、その自然環境は改変されつつある。四万十川では、高度経済成長期に建設資材として砂利が大量に浚渫され、河床の水深が変化した。また、中筋川などの支流の合流部が護岸工事とあわせて付け替えられた。最近では、河口部の漁港の整備に伴い、堤防工事や浚渫工事がなされ、ヨコハマと呼ばれる砂州が消失する事態となった(写真5)。そのため、感潮域の空間的範囲や下流および中流域における潮汐変動が大きく変わり、アユの産卵場やウナギの漁場などが移動し、これまで決して獲れなかった場所で海洋性の魚種が水揚げされるようになった。加えて、水防工事のために、本流だけでなく、支流も含めて、河岸がコンクリート化され、多様な魚族資源の棲みかとなっていた石垣や葦原も減少傾向にある。この点は筑後川も同様の状況にある。



写真5 四万十川河口部の砂州「ヨコハマ」の消失
(高知県幡多土木事務所提供)
上：2006年3月撮影・下：2008年3月撮影

そのため、漁家たちが構築してきた様々な民俗的知識の修正も余儀なくされることになった。前述したようなソコジオの動きや対象魚種の生態に変化が生じ、四万十川の水域の環境を把握しなおす必要性が出てきた。

同時に、四万十川自体の文化資源化によって、おかず捕りにみられるようなマイナー・サブシステムではなく、漁撈活動が観光業

の一翼を担うようにもなった。さらには、FRP船の普及により、新規の参入者が増加し、これまで培われてきた漁撈に関する慣習も崩れつつある。彼らは、生業活動というよりも趣味としての漁を行っており、たびたび、旧来の漁家との間で、漁場のなわばりや漁法等をめぐる衝突が起こっている。これは、生業活動としての漁撈の位置づけや生業複合におけるその意味を大きく変化させていると言えよう。

(6) 本研究では、四国の四万十川および九州の筑後川を事例に、漁家たちがどのように河川という水域環境を見つめ、利用し、生業としての漁撈活動を行ってきたのかを調査した。その結果、早い時代から都市化に伴う水資源や電力開発、洪水防止等の公共事業の中に取り込まれていった筑後川では、生業活動としての漁撈の位置づけは低下し、兼業化の浸透や食生活などライフスタイルの変容が、水域における人間活動を大きく変えていた。

また、四万十川においては、伝統的な漁撈活動やこれに基づく慣習(漁師たちの微細な知識と環境利用)を残しながらも、やはり、自然環境の改変や漁に携わる人々の生活や価値観、観光資源化によって、河川とのつながりが変化しつつあった。

漁家たちは、自らを取り巻く自然環境の可能性を最大限に引き出そうと努力を重ねてきた(卯田 2003・藤永 2014)。こうした生活者としての漁家の視点から、河川と人々のつながりを捉えていくことは、漁家の暮らし(生業と文化)という観点を通して、河川水域という環境を文化的・社会的に捉えることの重要性を示唆している。

(7) なお、本研究は、申請者の諸事情から調査期間の延長申請を行い、1年間のご猶予をいただいた。心より感謝申し上げます。また、調査の進行が遅れた一因として、2017年7月に九州北部豪雨により筑後川流域が甚大な被害を被ったことも挙げられる。今後も、今回の科研費研究を基盤として、引き続き、四万十川および筑後川において調査を継続していくとともに、これまでの成果を学会や論文等で発表していきたい。そうした研究活動を通じて、被災地の生活に学問の立場からまなごしを向け、少しでも皆様の復興にお役に立てれば幸いである。

最後に、2017年11月7日には、四万十市立下田小学校および地元漁協の依頼により、同校において、小学生と地域住民を招き、「四万十川下流域の自然環境と漁一川漁師の知恵と技術・工夫」というタイトルで講演を行った。こうした活動も研究の社会的還元の一環として付記しておきたい。

(引用文献)
秋道智彌編(2007):『図録 メコンの世界—

『歴史と生態一』弘文堂
 卯田宗平 (2003) : 『『両テンビン』』世帯の人びとーとりまく資源に関連する複合性への志向ー. 国立歴史民俗博物館研究報告』, 第105集, pp. 123-158.
 藤永 豪 (2009) : 有明海における漁民の環境認識ー地名と流し網漁師の事例からー. 教育系・文系の九州地区国立大学間連携論文集, 第2巻第2号, pp. 1-11.
 藤永 豪 (2010) : 漁民の認識する有明海の自然環境ー漁撈活動の中の民俗知ー. 佐賀大学有明海総合研究プロジェクト最終成果報告書, pp. 241-248.
 藤永 豪 (2014) : 昭和初期の喜界島阿伝における生業活動からみた環境利用と生活空間. 平岡昭利・須山 聡・宮内久光編『離島研究V』, 海青社, 65 - 82.

5. 主な発表論文等
 (研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕 (計0件)

〔学会発表〕 (計3件)

1. 藤永 豪 : 漁撈活動の中の民俗知. 平成29年度第2回在来知歴史学研究会, 佐賀大学, 2017年5月25日.
2. 藤永 豪 : 四万十川下流域における漁撈活動と民俗知ー川漁師の水域環境の認識と利用ー. 2016年度日本地理教育学会第66回大会, 慶應義塾大学, 2016年8月9日.
3. 藤永 豪 : 稲作をめぐる生業活動と環境利用. 立命館グローバル・イノベーション研究機構「年縞を軸とした環太平洋文明研究拠点」九州・佐賀シンポジウム「東シナ海と稲作漁撈・弥生文化」, アバンセ (佐賀県立男女共同参画センター・佐賀県立生涯学習センター), 2016年1月9日.

〔図書〕 (計1件)

藤永 豪 (2018) : 稲作をめぐる生業活動と環境利用ーラオスと佐賀の農山村調査をもとにー. 安田善憲・七田忠明編『環太平洋文明叢書6 東シナ海と弥生文化』, 130 - 153.

〔産業財産権〕

○出願状況 (計0件)

名称 :
 発明者 :
 権利者 :
 種類 :
 番号 :
 出願年月日 :
 国内外の別 :

○取得状況 (計0件)

名称 :
 発明者 :
 権利者 :
 種類 :
 番号 :
 取得年月日 :
 国内外の別 :

〔その他〕
 ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者
藤永 豪 (FUJINAGA, Go)
 佐賀大学・教育学部・准教授
 研究者番号 : 00409955

(2) 研究分担者 ()

研究者番号 :

(3) 連携研究者 ()

研究者番号 :

(4) 研究協力者 ()